

大陸（中支）

私の足跡

愛媛県 菅野 洋吉

戦後早や六十年近くの歳月が流れようとしています。
ます。

私の家は代々北条市の庄屋をやっています、
私は父石橋憲一郎、母ハツヨの六男一女の六男と
して生まれました。

家計は割と豊かで子女の教育に力を入れたため
か長男は医者、次男以下高等教育を受け、それぞ
れ恵まれた生活をしていました。三男、四男、五
男はそれぞれ出征していました。

私は昭和十七（一九四二）年十二月一日、丸亀
の西部第三十二部隊に入隊しました。外地要員で
すので早速身体検査や、被服や日用品の支給を受
け、十日には営門を出て多度津、尾道を経て下関
で輸送船に乗せられ、釜山に上陸し直ちに鉄道輸
送で北上、奉天（瀋陽）―山海関―南京に向かい
ました。

途中、私達と入れ違いに満期除隊する兵隊を乗
せた列車とすれちがいました。

南京から三千トン級の船に乗せられ、三日間で
武昌へ着き、待っていた初年兵受領の下士官につ
られれ武昌から粵漢線（エツハン）で汀泗橋に到着、鯨第二百
三十四連隊第一大隊第四中隊に入隊致しました。
正確には、第四十師団（鯨）歩兵第二百三十四連

隊（連隊長 戸田義直大佐）第一大隊（大隊長 山崎幸吉少佐）第四中隊（中隊長 山出政樹中尉）でした。

汀泗橋は田舎の農村部落で、バラック建ての木造兵舎での三カ月の初年兵教育が始まりました。

中隊の本隊は江北、江南殲滅作戦に参加しているため留守でした。教官はじめ助教の方は現役で、相当厳しい教育が待ち受けていました。一月の中支は寒気も厳しく教育の厳しさも加わって身も心も緊張の毎日でした。

内地で受領した新品の被服は全部脱がされ、古いよれよれの物と取り替えられ、編上靴もピカピカの新品は取り上げられ、代わりに支給されたのは皮のザラザラの靴の中に釘が出ている古い靴でした。そこで毎日釘を叩いて、ひっこめて演習に参加していましたが、二週間たつと左足の平と腿が腫れて痛くなり、大隊本部の医務室へ二週間の入室となって、漸く痛みもとれ退室して中隊へ

帰りました。

早速、班長から「気合が抜けている」とビンタの嵐でした。

三月末に初年兵教育は終わりましたが、内務班の成績は六十人中ビリで、幹候の資格者が私を入れて六人中最下位でした。

中隊主力は華容で警備に就いているが、毎日一〇二人戦死するので早く「初年兵を寄越せ」とのことと鉄道で学州まで行き、洞庭湖を船で渡り、他の連隊の横井大隊の警護のもと華容へと行軍して行きました。途中、墨山舗の七女峰で横井大隊が敵と遭遇し交戦となったので、私達初年兵も戦闘に参加しました。

敵は頑強で我方の損害も大きく、なかなかからちがあかず師団配属の独立山砲第二連隊（森戸山砲隊）の応援到着を待って、山砲四門の砲撃に呼応して攻撃を開始し、頑強に抵抗する敵を漸く撃退することができました。

横井大隊の損害は大きく三十人の死傷者を出

し、戦死者の火葬の手伝いをしました。森戸山砲隊はその後、南方軍の配下に入り、ビルマ作戦開始に伴いインパール攻略の「烈」師団に配属となり、多大の損害を受けられたそうであります。

四月中旬に華容に着き一晩休みましたが、銃声が度々聞こえなかなか眠れませんでした。この街から四、五キロのところに第四中隊の麻里泗の陣地があり、私はその第一陣地に配属されました。

陣地は第一から第三陣地まであり、第一と第二陣地にはそれぞれ坑道式トーチカがあり、なかなか堅固な陣地でありました。

配属されて早速に陣地構築のため毎日毎日壕掘りと土囊積どふしみが日課でした。夜は不寝番が毎日、私と伊藤君は心身共に疲れ果て、その上、敵は毎朝四く五時になると必ずチェコ銃と迫撃砲のお見舞でしたので、このままでは身体が持たないと思いました。そして願わくは大隊本部か連隊本部に勤務で出してくれないかと願うようになりま

した。

たまたま連隊本部から試験官が来て大隊から十五人の候補者が試験で選ばれ、さらにその中から五人の選抜の中に選ばれ、華容で二カ月の教育を受けることになりました。

暗号教育の始まりです。いよいよ師団司令部へ出発するという前夜、申告をする段になり擲弾筒なげだんじょう分隊長から注意を受けたことを私の小銃班長が怒り、イヤというほど地下タビでビンタをはられ、口惜しくてその夜は眠れませんでした。

普段からビンタつりで有名な小銃班長でしたけれどあんなに叩かなくてもと腹が立ちました。

翌朝眠られぬまま朝四時に起床し、連隊本部（石首）に向けて出発、夕方到着しました。石首から船で師団司令部のある岳州に行き二カ月間の暗号教育を受けるようになりました。教育終了後、成績が良かったのか師団司令部の暗号班勤務となりました。

九月から年末まで岳州で暗号業務に従事しているうち私一人だけ漢口の第十一軍司令部要員として昭和十九年一月初めに行くことになりました。

軍司令部では毎日、大本営と各師団との通信で大変忙しい勤務でした。漢口での仕事は昭和十九年三月中旬まででした。下旬には湘桂作戦が始まり第十一軍の戦闘指令所は蒲折へ進出しました。

次いで岳州、新市、長沙、と移動し、いよいよ衡陽へと前進して行きました。衡陽は真夏の中、四十五日間にわたる大激戦で、三回の総攻撃が行われました。玄米と乾燥野菜のみの栄養不足とコレラの発生、そして猛烈な暑さの三苦に、参加将兵の苦労は言語に絶するものでした。

九月漸く衡陽を陥し、続いて全県―桂林と司令部は移動します。桂林へは十一月初めに攻撃を始め、一週間でこれを落とし、柳州へは第三師団と第十三師団が先回りして桂林より一日早くこれを占領していました。

軍司令部は柳州へ移動して鯨の第四十師団が第

二十軍（桜）集団に編入されましたので、第十一軍高級副官が旅団長に転出されるのに付随して、私は柳州から汽車で衡陽まで当番をしながら副官と別れました。

衡陽では入院患者で元気になった人と共に（五〇人位）中隊に復帰することになりました。

中隊は粵漢打通作戦に出動中であり、私達は追及することになり、鉄道線路沿いに軍公路を行軍して坪石に到着。ここで中隊の留守隊に合流することができました。

続いて坪石を出発、樂昌、曲江を経て贛州で懐かしの中隊本部と合流しました。中隊では命令受領の助手をしながら一路南昌へと行軍。敵も我々のあとを追尾しながら北上してきました。

昭和二十年八月十九日、南昌の手前二キロ位の所で、私達は日本降伏の通知を受けましたが、その前日追尾してきた敵と交戦、十人程の戦死、負傷者多数を出してしまいました。終戦の通知が早

ければ損害を出さずにすんだものをと残念に思いました。

八月二十五日、南昌対岸の九江に渡り、揚子江（長江）沿いに南京目指して行軍し、昭和二十一年二月十日到着。私は師団司令部に復帰を命ぜられ、南京城門外のドブ浚いや石畳の修復作業に従事しました。

軍倉庫には糧秣や被服がギッシリ入っているので、接収される前に分配しようと輸送トラックを用意しているところを現地人が気配を察して大勢集まってきて掠奪が始まり大混乱した事もありました。

上海で復員船に乗る時に、三年前に初年兵六十人が四中隊に入隊したのに、ここで帰国できた者は僅か八人しかおりませんでした。戦死・負傷・病気・転属者が五十二人もいたことになりました。戦争の悲劇がこの例に表れています。

昭和二十一年五月二十六日博多に上陸。なつか

しの郷里に三年ぶり帰りましたが、家は空襲で焼かれて無くなっていました。松前の東洋レーヨンの社宅に移っていました。

父は昭和十九年に病死しており、母は元気で私を迎えてくれましたが三年後に亡くなり、三男は台湾で戦病死、四男、五男は無事復員していました。

私は復員後、菅野家へ養子に入り、結婚して一男一女をもうけました。一時松山税務署に勤めたこともありましたが、両親を見送りましたあと、家業の米麦製品販売業に励んでおります。

私の家内は結婚後十年目に心臓の手術をして元気になりましたが、私が五十歳の時に他界しました。子供達も結婚して内孫が三人もできました二人は大学、一人は高校とお蔭様で皆元気で通学しています。

今年四月に義母の七回忌をすませ、今では私独りぼっちになり、息子夫婦と一緒に暮らしております。